

11

古今和歌六帖第二帖
第二帖題目録
(六六六)

(六九七八)

肝

... 2000

它

人

115

(C17a)

11

恋　片恋　夢
うらみす　ないかしろ　難の思
おもかけ　うたゝた　涙たけ

祝

祝
若葉
つゑ
かさし

別

別れ
ぬさ
手向
旅
な
た
し
て

(一七三)

長歌……………

旋頭歌

古今和歌六帖第五帖
.....
（九六）一九

第五帖題目錄

……(二七—二四〇)

知らぬ人 いひはしむ 年へていふ 初めて会へる あした しめ あひ思ふ
あひ思はぬ こと人を思ふ わきて思ふ いはて思ふ 人知れぬ 人に知らるゝ 夜独りをり
独り寝 二人をり ふせり 暁に起く 一夜隔つ 二夜隔つ よひのま 物語り
日頃隔てたる 年隔てたる 遠道隔てたる うちきて会へる 道のたより 文たかへ 昔ある人 人つて
近くて会はず 人を待つ 待たす おとろかす 思ひ出つ 昔を恋ふ くちかたむ あつらふ
忘る 忘れず 思ひやす 思ひわつらふ 来れと会はず 人をとゝむ 人つま とゝまらす
ちきる 人をたつぬ めつらし 頼むる ちかふ かくれつま になき思ひ
いへとしを思ふ 惜します なき名 思ひやす わきもこ わかせこ になき思ひ
名を惜しむ 今ばかりなし こむよ かつみ

服食……(二四〇—二六三)

玉くしけ
玉かつら
かみ
もとゆひ
櫛
たま

玉たすき
鏡
枕
手枕
はた
ころも

夏衣	秋衣	衣ラフ	かり衣	すり衣	あき衣
----	----	-----	-----	-----	-----

矢 弓 笛 琴 文 言の集

刀
さや
はかり
扇
かさ
みの

つと

色……………(二六二—二六六)

色
紅
紫
くちなし
緑

目次

錦綾 糸 綿 布 (二六六～二六八)

古今和歌六帖第六帖

第六帖題目録 (二六九～二七〇)

草 (二七〇～二七二)

春草	夏草	秋草	冬草	した草	にこ草	雑の草
ねなし草	山吹	撫子	秋萩	女郎花	すゝき	しのすゝき
荻	らに	菊	草のかう	きちかう	りうたん	しをに
くたに	さうひ	刈萱	萱	はちす	杜若	こも
花かつみ	あし	ひし	ぬなは	ねぬなは	あさゝ	うき草
つき草	わすれ草	しのふ草	ことなし草	さねかつら	なき	たて
春	玉かつら	葛	紫陽花	さねかつら	あさかは	浅茅
つはな	かにひ	あめ	まさきかつら	さこく	すみれ	わらひ
ゆり	あめ	紫陽花	まさきかつら	さこく	すみれ	あさかは
あふひ	かたはみ	みくり	蓬	ひかけ	山たち	すけ
					いし	しは

虫 (二七二～二七四)

蟬 夏虫 きりくす 松虫 鈴虫 ひくらし (二七四～二七六)

量 はたをりめ くも 蝶 松虫 鈴虫 ひくらし (二七六～二七八)

木 しほり 花 萩花 紅葉 柿 まゆみ (二七八～二八〇)

楓	松	かへ	竹	たかむな	梅	紅梅
柳	桜	かには桜	花桜	山桜	には桜	ひさくら
藤	橘	あへたちはな	椎	さくら	梨	山梨
桃	すもゝ	からもゝ	くるみ	杉	くぬぎ	櫟
桂	かうかの木	あふち	つゝし	岩つゝし	ひさき	柏
ほく柏	ななめ柏	あせみ	山ちさ	ゆつるは	かたかし	はたつもり
しきみ	あせみ	山ちさ				さねき

鳥 (二八〇～二八二)

鳥 はなち鳥 ひな鳥 鶴 かり 鶯 はことり (二八二～二八四)

時鳥 千鳥 呼子鳥 かしき 鶴 かり 鶯 はことり (二八四～二八六)

かほとり かさゝき もす くひな 鶴 かり 鶯 はことり (二八六～二八八)

版 一、桂宮本古今和歌六帖 第一帖本文巻頭 (二八八～二九〇)

一、御所本古今和歌六帖 第一帖本文巻頭 (二九〇～二九二)

一、桂宮本古今和歌六帖 第五帖部分 (二九二～二九四)

一、御所本古今和歌六帖 第五帖部分 (二九四～二九六)

目次 (二九六～二九八)

七

凡 例

- 一、圖書寮叢刊は、書陵部蔵書群のうち、歴史・国文その他の資料的価値の高いものを逐次翻刻出版するものである。
- 一、本書の題字は、慶長勅版「日本書紀」および「職原抄」より集字した。
- 一、本書は、平安前期の類題和歌集である「古今和歌六帖」を、書陵部蔵本により翻刻するものである。
- 一、この翻刻は、上巻「本文篇」と下巻「索引・校異篇」の二分冊とした。
- 一、本書は本文篇として、書陵部蔵桂宮本（六冊、五一〇・三四）を底本とし、同御所本（六冊、五〇六・一三）により校合した。

一、文字は原則として当用漢字・通行漢字を用いた。

- 一、校合本による校異は、原則として6ボに組み「」を附した。

例 「ナシ」のちをは 校合本には、「ナイ」という底本校異がないことを示す。

例 と思へはイ 校合本の本文が「と思へは」であることを示す。従つて、「思へはイ」という校異は、「ナシ」であるが、こうした場合は煩瑣になるので記さなかつた。

例 底本 かやはら

校合本 かやはら

底本 松の

校合本 松の

いつれの場合も、底本のままとし、校異部分の「イ」の有無については、扱わなかつた。

凡 例

一、底本中、片假名の細字で行間に補入されている歌、平仮名や片仮名で補入されている作者名等は、8ボ・7ボの活字を使用して原本の体裁に近づけた。

一、各歌の歌頭に注した洋数字は、翻刻底本の歌順による、各帖毎の通し番号である。翻刻底本になく、校合本にある歌は、その前にある歌の番号に含め、ダツシユ記号を附し、歌全体に「」を附した。

例 (第三帖) 133 なかれても――

133' 「トシフレト」校合本のみ存在。

また、各歌の末に注した和数字は、国歌大観所載「古今和歌六帖」の歌番号(三〇八七九〜三五三三五)であるが、表記上の便宜により、共通の三万台の表記を省き、下四桁の数字のみ記した。

例 (第一帖)

1 年のうちに――ことしとやいはん 八五

国歌大観番号では三〇八七九であることを示す。

一、脱字、誤記などが推定される場合には、() を附して編者の意見を注した。

古今和歌六帖 本文篇